

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 193



1987 DECEMBER

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1988年 HAJ登山隊員募集

東コンロンの雄峰

新青峰(6,860 m)—未踏峰

チベットと青海省に跨がる世界の屋根、青藏高原には恰も宝石をちりばめたように無数の湖水が点在します。その一つ可可西里湖の北にひっそりと聳える東崑崙の秘峰が新青峰（別名モノマハ、6,860 m）です。

記

時 期 1988年5月～7月

（本年の偵察結果により時期を変更した）

募集人員 10名

負担金 100万円

資格 冬山経験4年以上のHAJ会員（会員外の希望者は別途協議します。）

申込み先 HAJ事務局まで

〆 切り 定員になり次第〆切ります。

東部カラコルムの玉峰

リ モ(7,385 m)—未踏峰

HAJでは来夏、東部カラコルムに残された最後の玉峰とも云うべきリモI峰（7,385 m）へインド登山財団（IMF）との合同で登山隊を派遣することになりました。

つきましては、下記の通り登山隊員を募集しますので、参加希望の方は、HAJ事務局までお申込み下さい。

記

時 期 1988年6月～8月（約70日間）

募集人員 3 名

負担金 120万円

資格 ヒマラヤ登山の経験のあるHAJ会員
〆 切り 定員になり次第〆切ります。

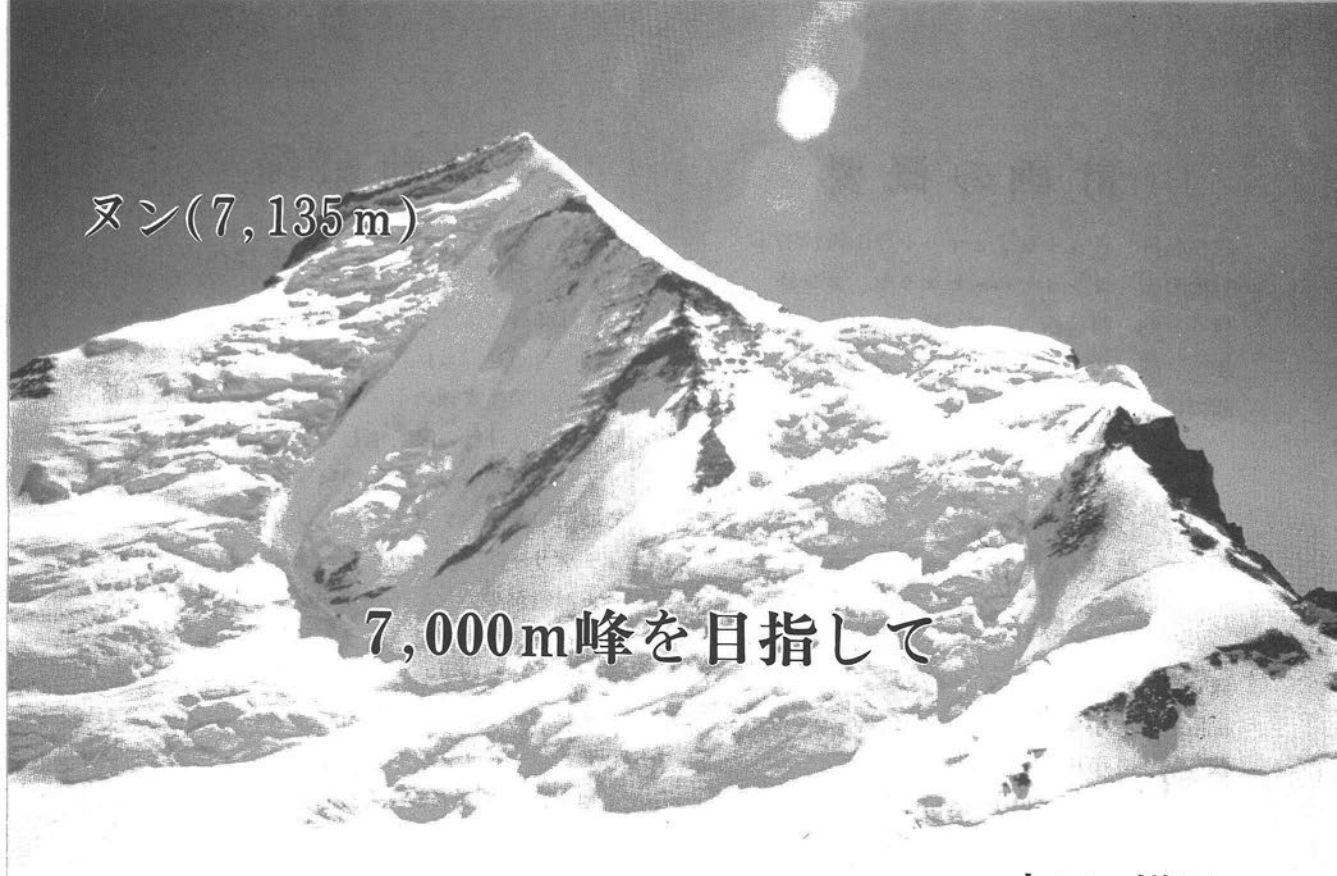
表紙写真

草原帯が、すべて“お花畑”になっている別天地から抜きこんでいる岩峰群、氷河を抱く山々を、4,100 mのお花畑からじっくりと望めた。氷河の奥にも山容の整った5,500 m～6,000 m 弱の山も。

（ゲニ峰登山隊）

ヒマラヤ No.193

1. ヌン——7,000m峰を目指して——HAJ女子ヒマラヤ登山隊
15. ヒマラヤニュース
18. ヒマラヤ登山入門 インド・ヒマラヤ編(6)
21. 連載 中国の少数民族(8) 阿里のチベット族②——山森欣一
24. 寸感・事務局日誌



ヌン(7,135m)

7,000m峰を目指して

隊長 木下 様子

1985年8月25・27の両日、日中婦人友好登山隊は崑崙山脈の一角、5,850mの八花氷山に初登頂した。この登山隊で友情、信頼が培われ、「どこかヒマラヤのピークに登りたい、できれば7,000m峰を！」との夢を抱いて帰国した。

次の目標とすべき7,000m峰をあれこれ考えてみるが、崑崙の残務があるため具体的なものにならないまま時間が過ぎた。1986年5月末に報告書が出来上ると、崑崙の夢を夢のままで終らせたくない、ぜひ実現させようとの思いが脹らんでいった。

同年8月、小泉が大雪山に登りに北海道を訪れたのを機会に、次回どうするのかを検討し、「来年の夏にインドの山に行く」ことを決める。この時点で参加見込みの木下、小泉、市川の3人で資料調べを始める。サトパントとヌンの7,000m峰2座と7,000m弱のケダル・ドームを候補にあげて、9月インド・マナリで催された『第4回ヒマラヤ登山観光会議』に出席の為訪印した日本ヒマラヤ協会(HAJ)理事の阿部淳氏にIMFへの仮申請を依頼した。

結果は、1987年の6～9月は私たちの希望する山及び他の7,000m峰は既に予約済みであり、山を変えるか、延期するか事態となった。3人の職場の事情等から来年に実施することを前提にガンゴトリの未だ予約の入っていない6,500m以上の山を選定することとした。

12月初め、HAJ専務理事の稲田定重氏から「シカル社のクマール氏が来日しているので、小泉さんが会って、希望する山の申請について相談してみなさい」との助言があった。小泉が通訳の寺沢玲子氏(3月に参加が決まる)とともに、クマール氏に私たちの希望を伝える。クマール氏は早速IMFと連絡をとり、ヌン西稜の内諾を得た。

こうして7,000m峰の夢は現実のものへと歩み始めた。山が決まり、隊員も寺沢、貝塚が加わって5人に増えると準備に張りが出てくる。隊員の居住地が、東京、埼玉、北海道(札幌、苫小牧)と分散しており、全員揃ってのミーティングは1回しか持てなかったが、手紙、電話で連絡をとりながら準備を進め、出発の日を迎えた。

計画の概要

隊の名称 HAJ女子ヒマラヤ登山隊1987年
 目標の山 カシミール・ヒマラヤ、ヌン峰
 目的 西稜からのヌン峰(7,135m)登頂
 期間 1985年7月26日～9月5日
 隊の構成 隊長 木下 祥子
 隊員 4名
 リエゾン・オフィサー 1名
 ハイ・ポーター 2名
 コック 1名

隊員構成

隊長 木下 祥子(43才)
 副隊長 小泉 恵子(33才)
 隊員 市川 春代(37才)
 " 寺沢 玲子(35才)
 " 貝塚 珠樹(26才)
 連絡官 MALA HONNATTI(33才、女)
 ハイ・ポーター KALMA SHERPA
 PASSAN SHERPA

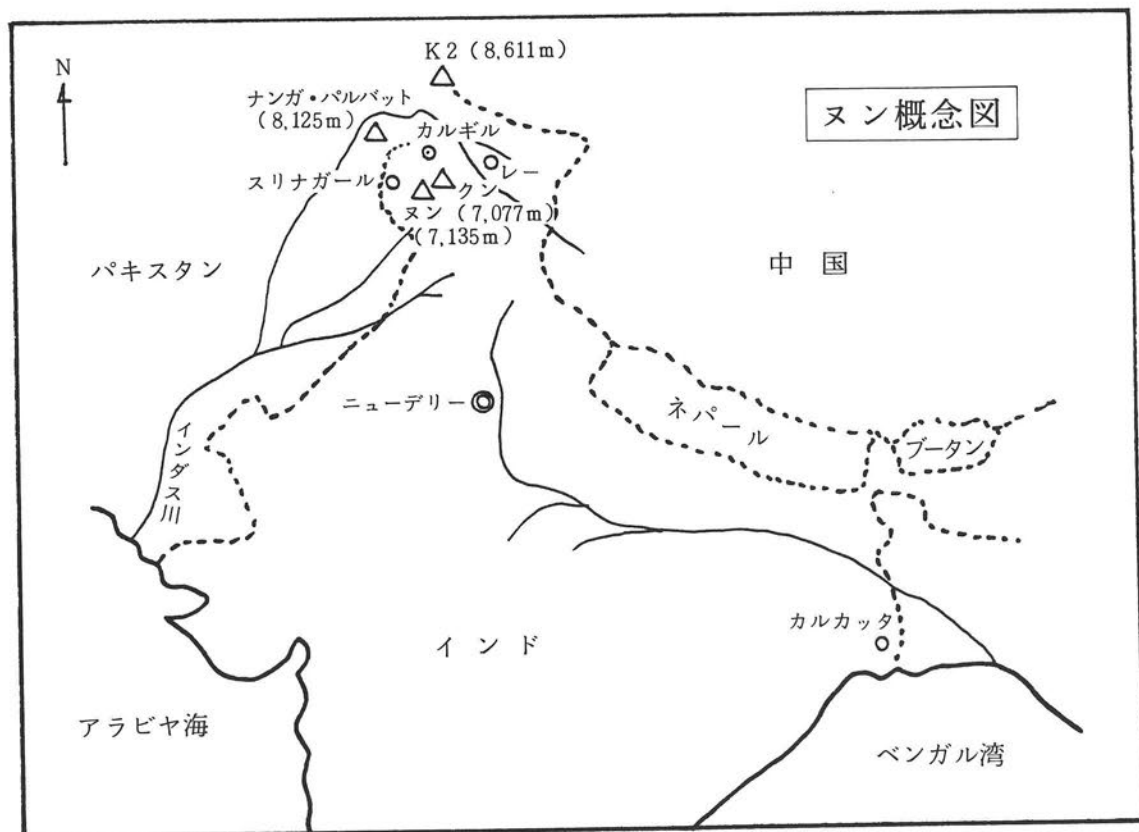
行動記録

インドへ、そしてBCへ

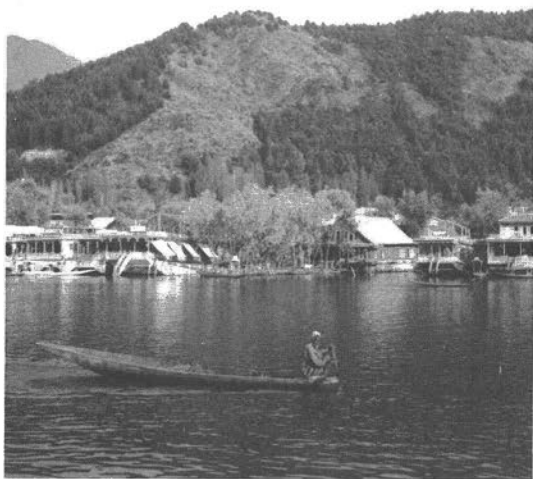
7月25日、HAJ事務所で2度目の全員揃っての打ち合わせ。事務局の尾形好雄氏から注意事項の説明と関係書類の引き継ぎがあり、その後事務局の方々が仕方の宴を催して下さる。

7月26日、小泉、寺沢の家族、友人に見送られて成田空港からデリーへと飛び立つ。20時過ぎニューデリー空港に降りると、予想どおり暑いが意外と湿度が少いため不快感がない。出迎えのシカール社の車でYMCAホテルへ。明日の予定を打ち合わせて就寝。

7月27日、朝一番にシカール社に行き打ち合わせ。この後二手に分れて行動。木下、寺沢はまずIMFに行きカトチ氏と打ち合わせ。カトチ氏とマナリ登山学校のマハビール氏から、今年のカシミールは異常気象で、5月下旬にスリナガルで降雪、6～7月のフランス隊(西稜のスキー滑降並びにパラバント飛行に成功)はスノープラトロー



▼緑と水の街、スリナガル



で腰までのラッセル。7月20日ドイツ隊がクンで3人が滑落し、重傷で入院との情報を得る。次に日本大使館へ挨拶に、そして郵便局を回ってYMCAに戻る。

小泉、市川、貝塚はシカール社員とともにデポ品を倉庫からYMCAに運び点検する。

7月28日、木下、寺沢はシカール社に行き若干の打ち合わせの後、シカール社員Mr. TRIPATHIとともに別送品の通関に行く。Mr. TRIPATHIが手際良く手続きを済ませてくれるが、割り当てられた担当者が仕事熱心(?)で、徹底的に荷を調べるため時間だけが過ぎ、ついにクリアできなかった。

小泉、市川、貝塚は食料等の買い出しと、デポ品の整理。

クマール氏が、帰りは日程の余裕がないからと夕食に招待して下さった。

7月29日、木下、寺沢はMr. TRIPATHIとともに再度通関に行く。担当者が変わり、3箱オープンしただけでO・Kとなる。しかし、手違いがあって荷を引き出せないため、Mr. TRIPATHIに委任してYMCAに戻る。午後からクマール氏とともにIMFに出かけ、リエゾン・オフィサーのMiss MALA HONNATTIに会う。職業は銀行員、今回が初めての任務で、C2かC3まで登りたいと希望している。一緒にYMCAに戻り、支給及び貸

与装備の確認をしてもらう。

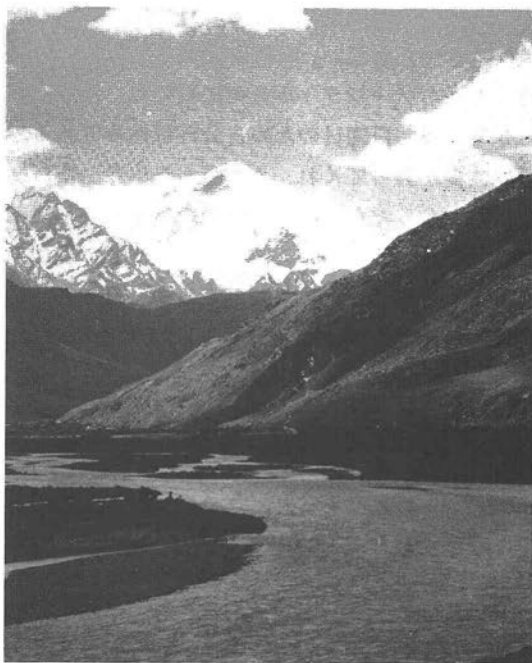
小泉、市川、貝塚はデポ品を今回使用するものとデポする物に分ける。

夕方、IMF前副総裁のN・D・JAYAL氏がYMCAに来られた。1953年のヌン初登時の隊員であったJAYAL氏には、女子隊のヌン登頂計画は感慨無量のようなのだ。

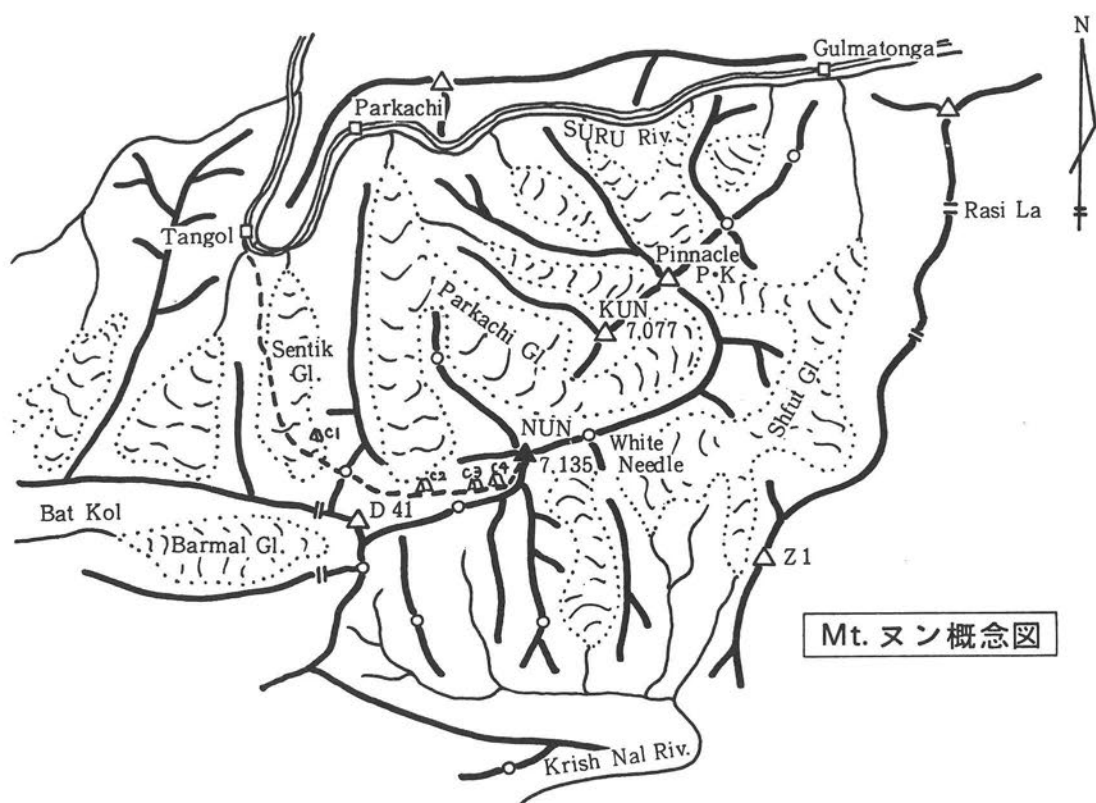
7月30日、使用しないデポ品を倉庫に運ぶ。シカール社に貴重品を預けに行く。リエゾン・オフィサー他の食料の契約等、デリー出発前に慌たしく片付ける。13時20分、隊員5人、リエゾン・オフィサーのマラさん、BCまでの一切を手配するため同行するビスト氏の7人はスリナガルへと飛ぶ。16時40分ハウスボートに落ち着き、お茶の後シカラ・ボートで湖水巡りをする。27日にシカール社で顔合わせをしたハイ・ポーターのカルマ達と再会する。

7月31日、州政府観光局の登山セクションの担当者と打ち合わせ、食料、標識ポール用の竹等の買い出しにと二手に分れて行なう。その合間にムガール庭園を見物、ちょっと観光気分を味わう。

8月1日、8時50分、チャーターバスで出発。ソナマルグの少し先で、奥からの車待ちのため、1時間半ほどの休憩となる。ところが3時間、4時間経っても一向に動く気配なし。軍事道路では



▲スル河からのヌン



致し方ないのだろうか。この道路ではこのような事は珍しくないのか、運転手は炊事用具一式を積み込んでおり、車内で調理を始めた。8時間待って出発。陽はとっくに沈んでおり、車窓からの景色は望むべくもない。日付が変わって1時過ぎ、カルギルのゾージラ・ホテルに着いた。

8月2日、日曜日のため官公庁は休みであるが警察署長が会ってくれ、カルギルを出発。昨日は気付かなかったが、スル川沿いの道から望む風景は集落の周辺だけが緑で、赤褐色の山肌が続き、荒涼とした感じだ。2時間ほど走って道が大きく曲ると、突然ヌンが姿を現わす。ピラミダルな白い大きな山容に、思わず歓声を上げる。しかし、ルートとする右手スカイラインは予想したよりも急で、身も心も引締る思いがする。

パニカルのポリス・オフィスでチェックを済ませ15時タンゴールの宿泊地に着いた。直ちに荷を降し、テントを張る。一時雨が降る。

8月3日(曇り一時雨) 3時頃から激しい雨がテントを打つ。起床時刻の6時頃にはあがった。

今日はBCまで往復しての順応活動。幕営地の背後のガレを抜けて踏跡程度の道に出る。谷を渡って高山植物の咲く山腹を登る。ジグザグに道が作られている。最後の登りの部分が雪がついている。ポーターは左手の岩場を軽々と登るが、リエゾン・オフィサーには難しいと判断して、雪壁に足場を切り、ザイルを固定する。少し下ったセンチック氷河から流れ出る川の左岸をBC(4,100m)とする。石を積んだ囲いや小さな紙くずが目につき人間臭さを感じるが、毎年数隊訪れるのに、きれいだというのが第一印象だ。正面にD41が見え、快適な場所だ。荷を石囲いに置いて下山。タンゴールの村に近づいた頃から激しい雨が降る。

8月4日(曇り) 体調の優れない貝塚と付添いの寺沢を残してBC入り。4つのテントを張り終えてから、ハイ・ポーターのパサンに食料等を持ってタンゴールに下りてもらう。

寺沢、貝塚はカルギルのエージェントの案内でタンゴールの周辺を散策する。(記、木下)

登山活動

8月5日(曇り夜に雨) BC-C1間はポーターの背負う重量は18kgであり、プラパールボックスの重量を調整する。隊員は10kg位の荷を背負ってC1設営に登る。石を積んで整備された道(ヌン・ハイウェイとでも命名したくなる)が奥に延びている。15分位で道も切れ、モレーン歩きとなる。川を右岸に渡ったあたりから雪におおわれている。急な雪壁を登り、不安定なガレ場を急登して上部モレーンに出る。台地状を少し進むと、流れの対岸にテントが見える。センチック氷河が左に曲るあたりで、標高4,450m付近である。ハイ・ポーターのカルマからスペイン隊と知らされる。挨拶に遠回りするのも大変なので、別の機会にでもと考え、進む。と、スペイン隊の人が登ってくるので待ってお互いに自己紹介をする。隊員9人で女性は2人、ルートは北稜(北西稜か?)。アイスフォールは易しいがロープをフィックスしてあるので使用してかまわないとのことである。左手の脆そうな岩壁を回り込むようにして支氷河の急斜面を登る。歩く速度が鈍くなる。一步一步登っていくとキャンプの跡が出てくる。右岸の縞模様の大岩壁の基部がC1(4,900m)だ。アイスフォールに動く人影が見えるが、ロープは双眼鏡でも確認できない。テントを張って下山。寺沢、貝塚、パサンがBC入り。荷も3日ばかりで全てBCに集結した。全員BCに揃い、そして任務を終えたビスト氏が明朝下山するので、BC開きと送別会を兼ねた宴を持つ。

ビスト氏に託そうと皆、手紙書きに精を出す。

8月6日(晴後曇り) 寺沢、貝塚、マラさんは順応のためC1往復、タンゴールのポーター5人とパサン、そしてコックのラクパは荷上げ。木下、小泉、市川、カルマは休養。とは言え、BCの整理に1日中かかる。

8月7日(晴後曇り) 小泉、市川はC1入り、カルマはC1に荷上げしてBCに戻る。木下、寺沢、貝塚、パサンは休養し、装備、食料の整理と装備リストを作る。(記 木下)

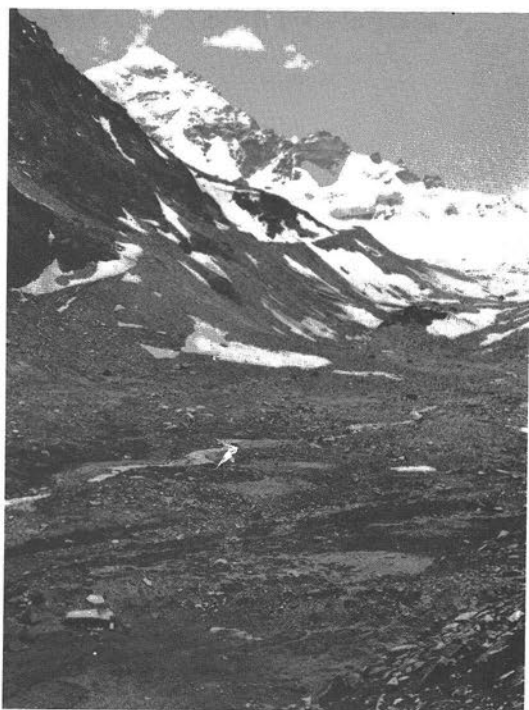
8月8日(晴後にわか雪) 今日からスノートレを登山靴、アイゼンに履き替えての行動となる。

スノープラトーから見えるヌン峰が、どう私たちを迎えてくれるのか、不安と期待を持って小泉、市川はC1を出発する。

アイスフォール(400m)の登りは、先月中旬より北西壁からの登頂を目指しているスペイン隊のフィックスロープを使わせてもらう。このアイスフォールのルート工作に丸1日を要すると思っていたので大いに助かる。アイスフォールにはまだ陽があたりずロープが凍っており、ユマールが利かないので注意して登る。アイスフォールの下部は急で50度はあるだろう。幾つかのクレバスを飛び越え、約200mのフィックスが終了すると、右手にD41を見ながらの緩やかな登りとなる。ここからスリナガルでようやく手に入れた竹竿を立てていく。

スノープラトーは広大な雪原である。スペイン隊の連絡官が何度も“Very far”と話していたのが頷ける。ヌン峰を前方にスノープラトーを進み、西稜の取付寄りにC2を建設し、ガスがかかってきたので早々に下山する。

真近に見る西稜、特に頂上直下や通称“カニのハサミ”は、私たちが予想していた以上に傾斜があり、私たちの力でやれるかどうか不安になる。北西稜を登攀中のスペイン隊を確認する。



▲BCとセンチック氷河～D41

木下、寺沢、貝塚、カルマ、パサンはC1に荷上げて、装備、食料のボックスを整理する。リエゾン・オフィサーも同行するが左膝が痛むため、スペイン隊ABC手前よりBCに戻る。

8月9日（晴時々曇り） 小泉、市川はC1からBCに下る。木下、寺沢、貝塚、カルマはC1入り。スペイン隊ABC上のモレーンで両パーティが出会い、お互いの状況を報告。

8月10日（晴後曇り） C1泊りの4人はC2に荷上げに出発。P 5,600 m（私たちはアイスクリームと呼んだ）の北東基部のあたりでC2の位置について検討する。小泉は交信の際、少し奥にC2を張ったかもしれないとのことで、荷を置き、頭痛がひどい寺沢を残してC2を確認に行くが、1時間歩いても見当らず、寺沢の体調が気掛りで確認できないまま引き返す。帰路はスノープレートにもクレバスが確認できる。寺沢はまだC1に居たマラさんとBCに下る。

小泉、市川はBCで休養。パサンはC1に荷上げしながらマラさんに同行する。

8月11日（晴後曇り後みぞれ） C3建設の前にローテーションを考える。ルート工作と荷上げの効率に良い人員配置と、隊員5人とハイ・ポーター2人の体調を併わせて検討し、小泉、市川にカルマを加えてルート工作に当る。そのためカル

マは今日C1で休養し、木下、貝塚が昨日のデポ品をC2に収納に行く。デポ地から15kg以上の荷を背負って昨日より上部にルートを取ってC2を目指すと、遠くからテントが確認できた。昨日もすぐそばまで来たのだった。テント付近はクレバスが開いているので移動させる。安全な場所を探すがどこもクレバスが開き始めているので、更に奥か昨日のデポ地が適当と考え、デポ地にテントを移す。

C1入りした小泉、市川からスペイン隊のリエゾンが、アタックに行った8人全員が戻らず交信も止絶えているので心配だとスノープレートに探しに登った、との交信があり、もし搜索協力の要請があった場合のことを考えていると、動く点が3つ確認できた。

C1でお互いの状況を報告して、今後の予定の打合せをして荷上げのパサンとBCに下る。

C1泊りの3人はスペイン隊の3人を細やかなtea partyに招く。彼等から頂上直下まで登ったが登頂を断念したこと、他の5人は日数ギリギリまでアタック態勢に入ることなどを聞く。お互いに片言の英語でなんとか通じるものである。

BC休養の寺沢はマラさんからベジタリアン食を全て用意するはずだったのに約束が守られていない、とのクレームを受けた。



▲BCにて（4,100m）

▼C 1 (4,900m)



8月12日(曇り時々雪又は雨) 小泉、市川、カルマはC3建設のためにC2入り。カルマ用の2人用テントを張るがポールが折れていた。2時頃から雨となるが湿雪でテントが濡れる。外はガスがかかっている。時折ガスが切れるが、山はほとんどガスの中。

木下、寺沢、貝塚、パサンはBC休養。

8月13日(曇り後雪又は雨) C2は相変わらずガスに包まれている。C3建設の出端をくじかれガッカリする。シュラフの中でうとうとしているとカルマが「ラムローノラムローノ」と大声で起こしに来る。テントから顔を出すとヌンが少しずつ姿を現わし始めている。急いで朝食を摂り出発する。しかし、途中よりホワイトアウトの状態になり、西稜取付から少し登ったところにダンライン、スノーバー類をデポしC2に戻る。

今日C1入りの寺沢、パサンとBC休養の木下、貝塚、マラさんはフィックスロープを使用させてもらったお礼を言いスペイン隊のABCを訪れる。お茶をごちそうになり、日印西の友好の一時を過ごす。

8月14日(曇り後晴) C2は昨日同様天気が良くない。西稜の取付まで行き、状態が良ければルート工作する予定でテントを出る。昨日のデポ地まで来るとガスで視界が利かなくなるが、大き

な岩を目印に左へトラバースし、上部へダンライン50m2本を固定し下山する。今日、食糧の荷上げがあればこのままC2に泊りルート工作を続けるつもりであったが、BCと連絡がとれないため、C1へ下る。

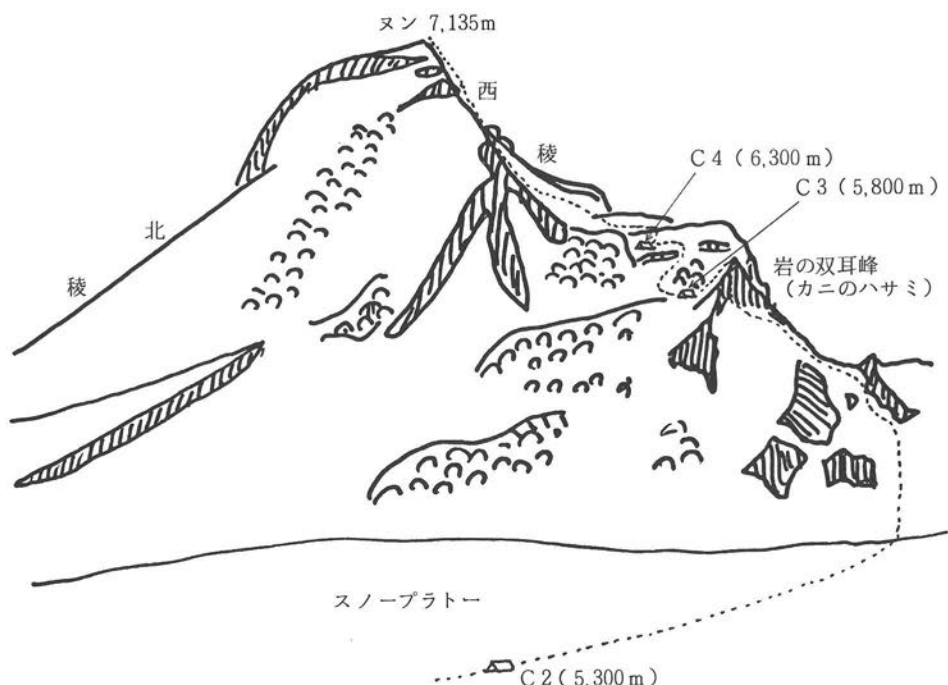
木下、貝塚がC1への出発の準備をしているとパサンが寺沢の手紙を持ってくる。寺沢は昨夜から熱と下痢が続いているためC2の荷上げを中止し、C1で休んでいると書かれている。C1に着いてすぐに、貝塚は寺沢の様子を診て指示を与える。1時間程すると熱が下がり快方に向った。しばらくして小泉、市川、カルマがC1に下りて来た。一昨日の夕方から交信がとれ始めたので一安心。スペイン隊の4人が立寄る。悪天候のためついに断念、22時頃まで交歓会が続いた。

8月15日(曇り) 木下、貝塚、パサンはC2荷上げ。2人用テントのポールが折れているためテープで補修する。C3へのルートを見るが、西稜だけがガスの中で一部分しか確認できない。小泉、市川、寺沢、カルマはC1休養。マラさんもC1に泊る。

8月16日(雪後晴後曇り) 昨夜は満天の星だったのに起きてみると3~5cmの積雪があり驚く。C2入りの小泉、市川、カルマとC2に荷上げの木下、貝塚は一緒に出発。アイスフォールに陽が



▲アイスフォールの登り



当たると雪面を照り返し暑い。クレバスも日増しに大きくなり、飛び越えたつもりでも後足がクレバスの端にひかかりそうになったり、足を前に出すとズシン、ズシンと不気味な音を耳にするようになる。大きく迂回しなければならなくなったクレバスをのぞくと竹竿が見える。不思議なことに妙な安心感が出てくる。木下、貝塚は荷上げ品を置くとC1に下山。

マラさんの見送りを兼ねて荷上げにBCに下りた寺沢、パサンは、スペイン隊は下山し、別のスペイン隊が既にBCにいる。BCの周辺の緑が増し高山植物が咲いている。BC～C1間は雪が融け、また氷河上の水の流れが大きくなったため、最短のコースが取れなくなり前よりも時間がかかるようになった等の情報を持ってC1に戻る。

8月17日(晴後雪) 小泉、市川、カルマは14日のフィックス終了点から左上気味にルートを取りコルに出る(フィックス100m)。ガスの切れ間からキシュトワール山群が見える。コルから上はガレ場、雪、氷のミックス帯で落石に注意しながら登る。部分的に氷面に凍りついて残置のフィックスロープを見つけ掘り起こしを試みるが、すぐに時間と労力の無駄と解る。ルートを5,700mまで伸ばしたところで雪がちらつき始め、時間切れとなる。今後の行動を考え、ミックス帯にも

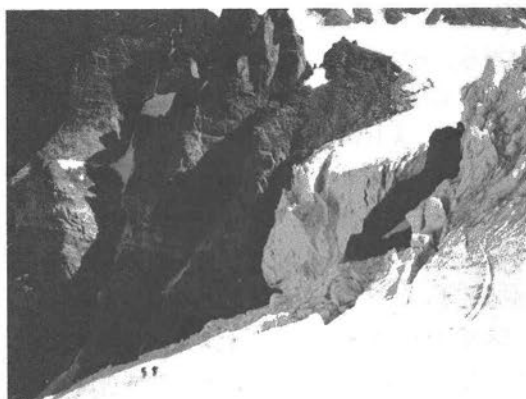
フィックスしC2に戻る。

木下、寺沢、貝塚、パサンはC1で休養。

8月18日(晴後ガス後小雪後ガス後晴) 小泉、市川、カルマは昨日に続きルート工作に向う。昨日のフィックス終了点からカニのハサミ下の雪壁ルート工作に時間がかかる(200mフィックス)。雪壁を登りつめると岩壁に3本のハーケンでしっかりと支点ができており、古いロープが8本も固定されている。カニのハサミの基部を偵察し、30mフィックスして下降する。

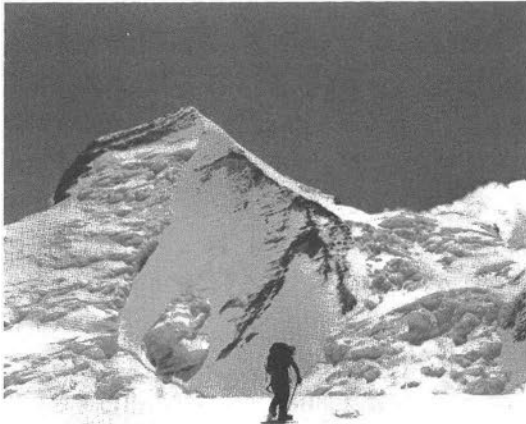
木下、寺沢、貝塚、パサンはC2に荷上げ。水を作り、ノートにメッセージを書いてC1に戻る。

(記 市川 木下)



▲アイスフォールの登り

▼スノープラトールとマン



8月19日（晴）市川は不調のためC1に下りることになり、止むなく小泉とカルマでC3建設に向う。（今日こそC3を作らなくちゃ…）という焦りと、確保の仕方等よく知らないカルマと初めてザイルを組むことに対する不安とで、重苦しい気持ちでカニのハサミに取付く。

60～70°の氷壁をダブルアックスで右端の岩塊寄りにルートを取り、150mのロープを固定し、抜ける。核心部といわれるだけあって、なかなかいい傾斜をしている。慎重にユマーリングしながらカルマもゆっくり登ってくる。

切れ落ちた雪稜に上がり、50mトラバース。ここにも残置フィックスがあるが、古いものは引張ると切れてしまう。

15:40カニのハサミ裏側の雪面を約100m下降した所をC3とする。念願のC3ができ、前途が明るくなる。久し振りに終日天気良し。

下降はバックステップで、アイスハンマーを打ち込みながらとなり、20:40C2着。

C2泊りの木下、貝塚とC2荷上げの寺沢、パサンは一緒にC2へ。5人でルート工作の2人の姿を追うが、ガスのため見えたり隠れたりだ。カニのハサミの上に立った時、皆の表情は喜びで輝いた。市川、寺沢、パサンはC1に下山。木下、貝塚はC3建設祝いの赤飯をつくる。

C1ではスペイン隊の体調の悪い1人（後で隊長とわかる）が休んでいた。かなりの重態の様子で1人の行動は不可能であり、夜になってパサンが付添って下る。

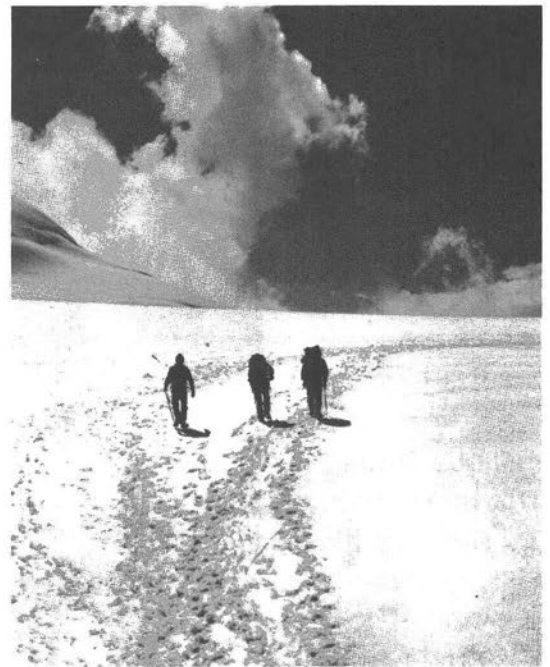
8月20日（晴）7時の定時交信で、寺沢から高山病のスペイン隊員のことについて報告があり、今日C2への荷上げを中止して様子を見に下りたいとの要望がある。こちらの予定が遅れており、その余裕がない。心配であれば休養の市川1人で様子を見に行き、C2への荷上げをするように指示する。しかし再度昨夜の症状から放っておけないとの訴えがある。人命にかかわることなので認める。

交信後、木下、貝塚はC3に荷上げに向う。朝の出発の遅れと、木下の体調が悪くスピードが遅く時間切れとなる。カニのハサミの基部に荷上げ品をデポして下山。

小泉、カルマは休養のためにC1に下りる。スペイン隊員の様子を見にRCに下りた寺沢は、夕方にはC1に戻る。

8月21日（晴後曇り後雪、みぞれ）木下、貝塚はC3荷上げの予定であったが、木下にむくみが現われたため中止する。7時の定時交信で、全員C1に集合を伝えるが、交信後に貝塚の方から体調が大変良いのでC2で休養してもかまわないとの申し出がある。尻上りに体調が良くなっている貝塚の申し出を受け、木下1人でC1に下りる。

C1で今後の見通しについて検討する。C3の建設により登頂の可能性が大きくなったが、日程



▲スノープラトール

▼カニのハサミの登りとスノープラトー



的にきつい。2～3日の登山期間の延長、C2で休養してのアタックを考える。そしてC2に登りたがっているリエゾンの扱いは、BCに下りる木下がC2まで付添って行動することを決める。昼食後木下はBCに降り、寺沢、パサンはC2に向う。

今日も夕方になると天気が崩れ、みぞれが降る。

8月22日（晴） 寺沢、貝塚、パサンはC3へ荷上げ。経験が浅く技術の未熟なパサンには、寺沢がつきっきりとなる。

小泉、市川、カルマはC2入り。

C2泊りを主張していたリエゾンが、登山終了までBCに留まることになり、木下1人でC1に上る。

8月23日（晴一時曇）

寺沢、パサンはC3へ荷上げ。体調が良い貝塚はC1に下りず、C4建設のため小泉、市川、カルマと共にC4入りする。

木下はC1からC2

に上る。

8月24日（晴） 早朝のC3からは、北方に大きな山塊、ナンガが、そして、一見して雲と見間違えうが、遥か西遠方には、カラコルムの山々が連なっている。K₂やチョゴリザらしき山も見える。改めてヒマラヤの一角にいることを実感する。

小泉、市川パーティが先行してルート工作し、貝塚、カルマが荷上げに続く。幾重ものハンギンググレシャーを迂回しながら広いクレバス帯を左上し、雪壁を直上後、氷塊を巻くように右トラバースし、上部スノープラトーへの出口を求める。ヒドンクレバスを避け、崩れかかった氷壁に取付き、恐々抜けると、広い雪原が広がっていた。

ピラミダルな南西壁が真正面に迫る平らな雪面をC4とする。ここまできれば、あとは一か八か登るだけだ。結局、C4へは大きく逆S字状にルートをとったことになり、固定した350mのロープを整理しながら、19時20分C3に戻る。

木下はC3へ向うが、忘れた水筒をとりに戻ったため時間切れとなり、荷をデポして下る。寺沢はC1から装備の荷上げ、パサンはC2で休養。20時の交信で、小泉から天候や日程的にもう余裕がないので、C3で休養して4人でアタックしたいとの提案がある。C2で休養し、体調をみてからのアタックを考えていたので即答を避けて、各々が明朝まで熟慮することとする。

8月25日（晴） 7時の定時交信で、本日は、



▲カニのハサミとヌン

▼C3～C4間の登り

C3で休養し明日C4入りし、C4から上のルートを偵察することにする。27日アタック、その際体調の良否を冷静に判断することを決める。

木下は打ち合わせと激励を兼ねてパサンとC3に上る。市川はむくみがひかないため、断腸の思いでアタックメンバーから降りることを自ら決断し夕刻、木下たちと共にC2に下りる。

この時点で、アタックメンバーは、小泉・貝塚・カルマの3名となる。

アタックは隊員だけでも可能だが、7,000mを越える高みでの標高差835mを1日で登降することはかなりきついだろうこと、そして、万が一、メンバーのどちらかに事故が生じた場合、残されたメンバーだけで、どれだけ充分な処置がとれるかということを考え、又、これまでのカルマの行動をみて、言葉こそうまく通じないが、数多くの遠征隊で培われた経験と勘の良さから、常に慎重で安心して行動を共にできる男と判断し、メンバーに加えることにする。

寺沢はC2で休養。

木下、市川、寺沢、パサンはC1に下りて、テント撤収、梱包、ゴミ焼却をする。予想以上に時間を費し、暗くなったスノープラトローを、C2に戻る。

(記 小泉、木下)

ヌン隊行動概要

- 7月26日 A1-301便にて日本出発～デリー着
- 30日 デリー～スリナガル (by Air)
- 8月1日 スリナガル～カルギル
- 2日 カルギル～タンゴール
- 3日 タンゴール……BC……タンゴール
- 4日 タンゴール……BC (4,100 m) 設営
- 6日 C1設営 (4,800 m)



12日 C2設営 (5,300 m)

23日 C3設営 (5,800 m)

26日 C4設営 (6,300 m)

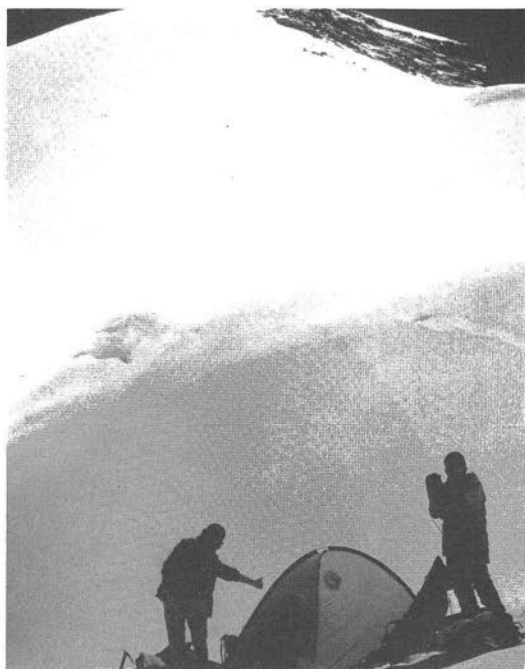
27日 アタック。小泉、貝塚、カルマの3名が登頂。

31日 BC撤収、タンゴール～カルギル

9月1日 カルギル～スリナガル

2日 スリナガル～デリー (by Air)

5日 木下、小泉、市川はA1-308便にて帰国の途へ



▲C4 (6,300m)

ア タ ッ ク

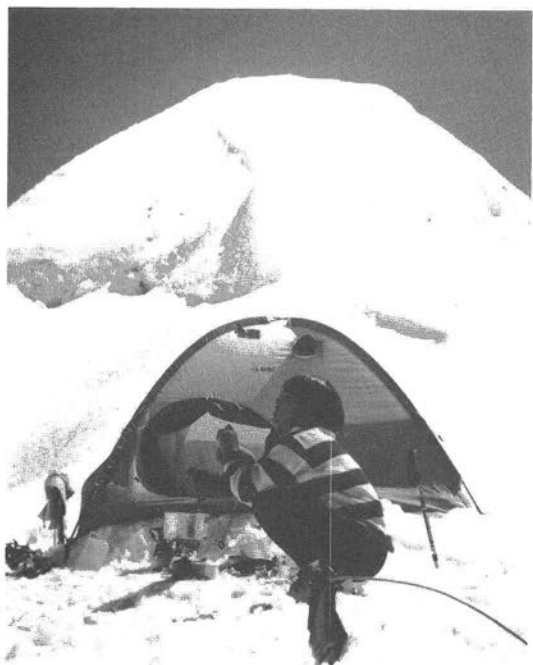
8月27日（晴）いよいよアタック。なのに1時間も寝坊し、5:40出発。本日も快晴だが、空の青さが薄らぎ、晴天域も終わりに近づいているようだ。昨日のフィックス終了点からは、3人でアンザイレンし、83年のH A J隊通り、迷うことなく西稜中間部に見える顕著な岩を目指し、慎重に足場を切りながら左上トラバース。この間の好天続きで雪が解け、ラッセルはないが下の氷が露出し、却って危険な状態になっている。

8:10、雪底を切り、西稜に飛び出すと、広大なスノープラトーが一気に視界に飛び込んでくる。北斜面はまだ陽が当らず、風も強く寒い。頭上には真白い頂稜が、紺碧の空を突き刺すように真すぐに伸びている。ここに出て初めて「よし、やれる！」という確信が湧いてくる。

アンザイレンしたまま、3人でトップを代わりながら登る。膝上のラッセルと覚悟していたが、予想外に雪は締まっており助かるが、遅々として進まず、山頂は一向に近づいてこない。

左手から伸びる北西稜の狭い雪面に、赤いテントが1張見える。スペイン隊だ。中から2人出てきて、私達が登っているのをずっと見ている。

途中、荒縄のような古いロープが50m位張って



▲アタック隊を見守る隊長（C2）

▼西稜上部の登攀

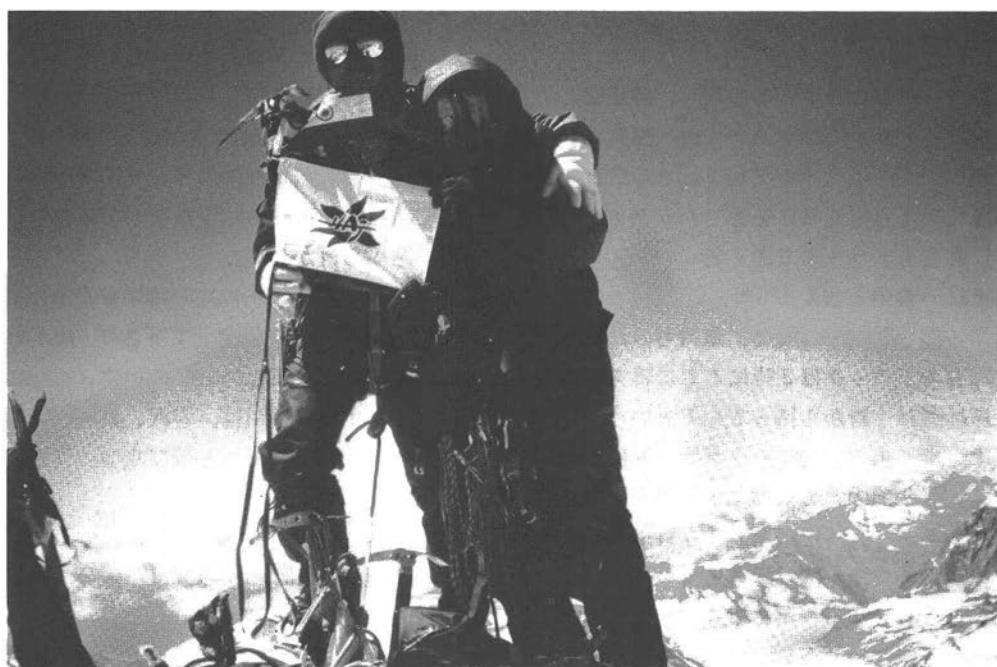


あり、しかも小さな角材の切れ端を支点にしただけのものである。このあたりから更に傾斜が増し、下降を考えると頂稜全面にフィックスロープが欲しい。しばらく登ると左手にガラ場が現われる。下から見るとこのガラ場を抜けた所が山頂だと思っていたが、雪稜は一段と狭まり、ラクダの背のような雪のコブが更に2つ続いている。1歩1歩新雪を踏みしめながら登っていくと、2つ目の雪のコブの上に何かしら見え始める。近づくごとに、それがボールだと確認できる。足元にボールが近づくと、その先はもう何もなかった。

12:25 無事頂上に立つ。皆が待機しているC2に、第一声を伝える。そして、皆の力なくして、決して頂上の3人はあり得ないんだということをひしひしと感じる。3人で抱き合う。カルマも涙ぐんでいるようだ。

風もなく360度の展望だが、遠方から雲が湧き出ている。背後には、黒々としたクンが真近に聳えている。スペイン隊のものと思われるトレースが頂上から北西稜へと伸びていた。

1時間後に下降開始。スタカットで慎重に降り、登りと同じ時間がかかってしまい、陽が沈み始める頃、ようやく南西壁に入るが、全く気が抜けず、持参したロープ100mを固定し、下降している間に暗くなり、最も恐れていた事態となる。懐電を



つけ、終始バックステップで降り続け、20時過ぎ、基部に降り立つ。

朝から飲まず食わずの体は、緊張が抜けるとともに“青菜に塩”となり、小泉と貝塚は、どうにも真すぐに歩けず、ヨレヨレになり、20：40テントに辿り着く。長い1日だった。（記 小泉）

8月28日（晴後曇り）アタック隊は昨日15時間行動しており、かなり疲労している様子なので、寺沢、パサンがC3まで迎えに上る。

木下、市川はC2に残り、仮登頂祝の御馳走作りとゴミ焼却をする。

C2に7人が揃い、嬉し涙にむせぶ。天も私たちに味方してくれたようで、今日から天候が崩れてきた。

8月29日（曇り）C2を徹収し下山。C1にはポーターが荷下ろしに来ている。26日に出来なかった分を急いで梱包し、ポーターに渡す。テントを張ったあたりは念入りに掃除をする。

BCでは登頂を祝しての飾りつけやお花が準備しており、ラクパの心遣いに胸があつくなる。1日早く北稜から登頂したスペイン隊、私たちの次に西稜を登るスイス・オーストリア合同隊も、お祝いに来てくれた。

今日は寺沢の誕生日。2つのお祝いでラクパが料理に腕をふるうが、バースディケーキが一番美

事だった。お祝いの宴が遅くまで続く。

8月30日（晴後曇り）15時頃からポーター10人が荷下ろしをするので、それに間に合うよう、テント干しや梱包作業をすすめる。スペイン隊は本日下山。

BC最後の夜なので、市川の号令のもとに隊員それぞれが、得意の料理を作る。



▲遠くK2を望む

帰 路

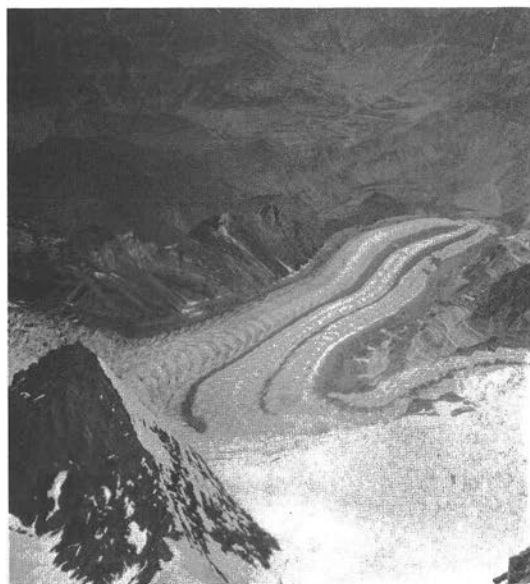
8月31日（曇り）テントを撤収し、掃除をして下山。タンゴールからはジープ1台、隊員とマラさんが乗ってゾーグラ・ホテルへ。ここで車の手配をするため1日早くBCを発ったラクバと再会。ビスト氏たちもトラックで遅く着いた。

9月1日 夜中と言える3時30分に2台のジープで出発。1時間走った所で、車待ちのため停車、カルマたちのトラックは3時にここに着き、他の日本人旅行者は1時から待っているという。15時30分、ようやく出発。20時ハウスポートに着く。

9月2日 午前中、カーペット工場を見学に行く。午後からデリーへと飛ぶ。1ヶ月ぶりのデリーは湿気が多く、汗が流れ落ちる。

9月3日 HAJ事務局に電話で報告。シカール社の精算予定であったが、クマール氏が出張中で明日となる。午後からIMFに報告と挨拶に行く。マラさんが先に来ており、一緒にカトチ氏に会う。マラさんは「自分が登れなかったのは食料が数日でなくなったこと、装備をハイ・ポーターが使用したためだ」と苦情を言う。こちらの事情を話すが、聞く耳を持たない様子だ。しかし最後は仲良く昼食をとって別れる。次に日本大使館に挨拶してホテルに戻る。

装備の一部を小包で送るため郵便局に行くが、大きさ、重量共に規定をオーバーしていると受け



▲バルカチ氷河を俯瞰する

付けてくれないため、梱包のしなおしだ。

9月4日 ヒンズー教行事のため会社、官公庁が休みであり、今日もシカール社の精算ができない。朝、N・D・JAYAL氏が訪ねて来られ、私たちの登頂を自分のことのように喜んで下さった。そして明日まで多額のお金を貸して下さり、ただただ感謝するばかりだ。

9月5日 シカール社の精算を済ませてから、JAYAL氏が昼食に招待して下さり、出かける。夫人も同席され、楽しい一時を過ごす。

木下、小泉、市川は、寺沢、貝塚、シカール社員に見送られて成田へと飛び立つ。（記 木下）

お わ り に

「7,000m峰にノ」の夢は、隊員2人とハイポーター1人が登頂し実現した。

これは、国内での準備、インドでの渉外その他の用務、登山活動に入ってからルートの工作に、荷上げにと全員が持てる力をフルに出して頑張ったからだと思う。加えて、天候がうまく味方してくれたこと、ハイポーターの雇用なども要因であった。

「インドでは、こちらの計画どおりには進まないと考えた方が無難」と経験者からの助言があった。しかし、今回は、こちらにミスがあった場合も含めて、予定どおり事が運んだ。隊員は勿論、リエゾン・オフィサー、エージェントが努力したからではあるが、インドの役所も臨機応変に処理する融通性が出てきたのだろうか。兎に角、BCまで日程に狂いが生じなかったのは幸運であった。

登山活動が終りに近づく「次はどこを考えている」が話題になった。8,000m峰に、興味を持っている地域にある山を等々、夢が芽生え始めている。各々の置かれている現実を考えると、次の計画の強力な担い手になれるかどうかはわからないが、HAJ女子隊が計画されることを願ってやまない。

今回の計画は、発端からHAJ諸先輩の適切な助言と手助けがあったからこそ実現させることができました。この場を借りて、お礼申し上げます。

（木下祥子）

地域ニュース

《 中 国 》

チベットで独立要求デモ

9月29日のラサ発新華社電によると、27日午前10時頃、自治区政府の所在地ラサで21のラマ僧と雪の山にライオン像の旗を掲げた5人が「チベットは独立すべきだ」などのスローガンを叫びながら市内の繁華街を練り歩き、チョカン（大昭寺）広場では周りに集まった人々にアジ演説し、さらに自治区政府前迄デモを続けたと云う。

10月1日、新華社電によると、ラサで9月27日に続いて、ラマ僧10人余りと身元不詳者数10人が「チベット独立」を叫んで八角街をデモ。警官隊と衝突し、発砲騒ぎに発展、死者6名、重傷者19名を出した。

3日、ラサの警察当局はラマ教寺院を封鎖し、夜間外出禁止令を布告。『人民日報』は「祖国分裂に反対し、安定団結破壊に反対する」との評論員論文を掲載。中国当局はラサからのデモに関する報道を禁止した。また、インドのニューデリーでチベットからの亡命者約300人が抗議デモを繰り広げた。インド亡命中のダライ・ラマ14世は、同日、人権擁護グループが、中国政府によるチベット人の処刑、投獄を中止させるよう働きかけることを求めた声明を当地の事務所で発表した。

また、この日、スイスの首都ベルンでもチベット人200人が中国大使館前で集会を開いた。

4日、『人民日報』は新華社記者の騒乱現場ルポを掲載、中央テレビはデモの模様を初報道した。

5日、ラサのガンデン寺院など3つのラマ教寺院の指導者が国連に対し、「チベット独立への支持、中国当局の人権抑圧への非難」を訴える声明を発表。同日、党対外連絡部スポークスマンは記者会見し、ラサのデモ騒乱を批判した。

7日、中国外務省スポークスマンは記者会見し、「情勢は一応平静化」とラサの状況を説明し、米上院本会議が6日、チベットの人権問題解決を決議したことは「内政干渉」と抗議した。また、中

国国家民族委スポークスマンは、シガツェでもデモが発生したとの報道を否定した。

この日、インド政府は、中国チベット自治区と接する国境を閉鎖、国境警備隊に対し、チベットからの難民流入を阻止するよう、命じた。

また、青海省とチベットを結ぶ青藏公路も閉鎖された。

8日、チベット自治区外事弁公室は、ラサで取材中の米国など15人の外国人報道機関記者に48時間以内の退去を通告した。

北京放送などによると中国の全国人民代表大会外務委員会は、ペル氏ら米上下院議員ら3人のチベット問題に関する発言は、「内政干渉」であり、「最大の遺憾」と「強烈な非難」を表明する声明を発表した。

新華社は同日、ラサが平静を取り戻したと報道。

10日付の『人民日報』は、チベットからの外国人記者退去通告に米國務省が遺憾の意を表明したことについて、中国外務省が発表した「報道の自由に制限を加えるものではない」との見解を示した。

この9月下旬からチベットのラサで起った一連の騒動により、中国外務省スポークスマンは14日、チベットへの外国人の旅行は、なお当分認められないとして、次のように述べた。

チベット自治区人民政府は、正式に許可を受け、既に協定を結んでいる観光団以外は、当分の間、旅行者および訪問客を受け入れない旨決定した。

（以上、各新聞のニュースから）

チョー・オユー登頂と パラグライダー下降

中国側からのチョー・オユー（8,021m）登頂と同峰からのパラグライダーを目指していたカモシカ同人登山隊（高橋通子隊長）は9月20日、21日、22日の3日間に高橋隊長を含む6隊員全員と報道隊員2名、及びシェルパ5名が登頂に成功した。また、21日に登頂した高橋和之隊員は頂上からパラグライダーにてBC付近に下降した。

同隊は9月1日にBC（5,700m）を設営し、登山活動を開始していた。

同志社大隊のカント派遣延期

インド国境近くのチベット自治区山南地区錯那県に聳える未踏峰カント（7,089 m）を目指す予定だった同志社大学カント峰登山隊は、中国側から中印国境付近の緊張を理由に受け入れ困難との通告を受け、来春以降に出発を延期することになった。

2つの未踏峰は陥落せず

○メイリーシュエシャン（梅里雪山、6,740 m）

雲南省の最高峰である同峰の初登頂を目指した上越山岳協会梅里雪山登山隊（多田勇三総指揮、渡辺義一郎隊長ら9名）は、8月12日に昆明を出発し、16日に徳欽県の明永村を経由してBC（3,040 m）に到着。其后、A・BC（3,800 m）、C1（4,200 m）と順次キャンプを展開したが、連日の悪天候により、9月6日までの21日間で結局、4,900 m迄達っただけで断念となった。

雲南省西北部の横断山脈に位置する同峰周辺のこの時期の天候は、連日、雨（高所では雪）と霧で、主峰を見ることが出来たのは、帰る日1日だけと云う最悪の状態のようであった。現地のチベット族の村民の話では、1年で一番天気の良い時期は、6月から8月の初旬にかけてで、10月の初旬から5月頃にかけては雪が降ると云う。

○クラウン（皇冠峰、7,295 m）

新疆ウィグル自治区の西端、カラコルム山脈にある同峰の初登頂を目指した静岡大学西域学術登山隊（山本良三登山隊長ら13名）は、6月18日に大本営入りした後、ABC（4,410 m）、C1（5,100 m）、C2（5,800 m）、C3（6,550 m）と順次キャンプを展開したが、8月22日、6,950 mを最高到達点に断念となった。

《パキスタン》

駐パ大使に小林氏、

パキスタン観光省登山局長も交代

政府は8月21日に任期が長くなった駐中国、駐英、駐国連の三大使の交代をはかる方針を固め、

それぞれ9月中に後任が発令された。この移動に伴い、柳健一・駐パキスタン大使は、オーストラリア大使になられ、（中島敏次郎前オーストラリア大使は、駐中国大使になられた。）柳・駐パ大使の後任には小林俊二氏が充てられた。

小林 俊二氏（こばやし・しゅんじ）

昭和5年7月19日生、法務省入国管理局々長から駐パ大使。

また、パキスタン政府観光省登山局長のMUNEERUDDIN氏も此の程、退任され、後任にはM. HANIF RAZA氏が就任された。

ナンガ・パルバット（中央側稜）断念

ナンガ・パルバット（8,126 m）の中央側稜を目指していたアウト・ドアーズ・ジャパンクラブ・ナンガ・パルバット登山隊は登頂を断念し帰国した。

7月31日、BC着。8月2日より高所順応を開始し、4日、C1着。アプローチのゴルジュの中に滝があり1本ロープを固定する。

第2ステージとしてC3への工作を目標として8日にスタート。ヴィーラント氷壁はノーザイルで往復し、C3の台地下に抜けるルンゼから雪稜を風雪の中で工作し、6本のロープを固定する。

第3ステージはヴェルツェンバッハ・クーロワールを突破する目標だったが、3日目、C2（ヴィーラント氷壁の中のデボ地）に着いて一休み中、頭上の氷塔を越えた雪崩を被り、河野が全装備を入れたザックを流失。BCへ下り、玉田、早坂のみの苦しい資材荷上げとなる。河野はBC 1,000メートル下の雪溪でシュラフ、羽毛服などの貴重品を回収、紛失品は、シェル・ルート（南西稜）をあきらめたアメリカ隊より購入し、4日目に一気にC3へ復帰して来た。天候は良く、10日に及ぶ第3ステージで1ピッチを残して工作終了。

9月1日、月が満月になる日に照準を合せてアタック・スタート。3日目に最高点に達した時、氷塔の崩壊に3名とも負傷、河野、早坂の傷は重く、初めに河野、再度登り直して早坂をBCに収容、ただちにアストールの病院へと下る。

10日、元気になってBCへ戻ったが結局、玉田

単独によるアタックとなり、大変苦戦してヴェルツェンバッハのルートを作り直し、メルクル氷田へ抜けたところで、体力の限界を悟り、9月20日、一気に3,000メートル下降してBCに戻り、登山を終了した。

(同隊々長 玉田 仁)

《インド》

カシミールで印パ衝突

インド国防省スポークスマンは29日、パキスタンと国境を接する北部カシミール地方のシアチェン地区にあるインド軍の駐屯地に、23日から25日までの3日間、パキスタン軍が繰り返し夜間攻撃を仕掛けてきたが、インド軍はこれを撃退し、パキスタン兵150人を殺害したと発表した。インド側の死傷者は「非常に少ない」という。

(10月1日 朝日新聞)

《ネパール》

ポスト期の日本隊

○ガネッシュ・ヒマールV峰(6,986m)

福井山岳会ネパールヒマラヤ登山隊(牧野治生隊長(42)ら5人)は、チリメ・コーラから同峰の南面に入り、9月8日、4,300m地点にBCを設営し、未踏の南稜ルートに挑んだ。其の後、C1、C2、C3と上部キャンプを展開し、10月4日登頂に成功した。登頂したのは渋谷好司(29)、松田靖彦(28)両隊員とシェルパ2人。一行は6,300mのC3からアタックして頂上に立った。

同峰は、1980年に慈恵医大・ネパール合同隊がサンジェ氷河北面ルートより初登頂しているが、このルートは現在、中国領となっているためネパール側から登ることはできない。

○ブモリ(7,161m)

群馬県・境町山の会ブモリ峰登山隊(大橋良雄隊長ら11名)は、10月12日に南稜から登頂に成功した。登頂したのは金子悦治(30)、高田智博(28)両隊員とシェルパ1人で、午前11時55分に頂上に立った。

トピックス

世界最高峰は、やはりエベレスト

伊調査委がK2説を否定

イタリア国立調査委員会のエベレスト調査チームは7日、“世界の屋根”といわれるヒマラヤ山脈のエベレストが、K2よりも高く、世界最高峰との結論に達したと発表した。

調査チームを指導した地質学者のアルディト・デジオ氏(1954年K2初登頂のイタリア隊の総隊長)によると、両山ともこれまで測定された標高よりエベレストは24メートル、K2は5メートルそれぞれ高く、エベレストは8,872m、K2は8,616mの高さだったという。

2つの山の高さについては、米国の調査隊がことし3月、K2の方がエベレストより275m高いとの調査結果を発表し、世界一論争が起っていた。

(10月9日 朝日新聞)

西藏登山協会代表团来日

10月25日～31日にかけて洛桑達瓦氏(西藏体育運動委員会主任)を団長とする西藏登山協会代表团5名が来日した。今回の来日は、去る4月に長野県山岳協会と友好兄弟山岳協会協定を締結したのを記念して、その祝賀と一層の友好発展のために長山協が招請したもので、一行は滞在中、長野・東京などで友好・懇親を深められた。

H A Jでも25日に歓迎夕食会を開いて遠来の古い友人を歓迎し、今年のラブチェ・カン合同登山や将来の西藏登山計画などについて懇談した。

インフォメーション

東京集会のお知らせ

11月の東京集会は、中国・チベット登山協会との合同で初登頂に成功したラブチェ・カン登山隊の報告を予定しております。多数のご来会をお待ちしております。

日時 11月30日(月)午後7時～
場所 H A J ルーム

インド・ヒマラヤ編(6)

デリー到着

塔乗機がデリーのインディラ・ガンジー国際空港に到着したら、エアー・ブリッジ（2階）から出て、階段またはエスカレーターで1階の到着フロアへ降り、以下の順序で入国手続きを済ませます。

○入国審査（Immigration）

機内で記入した入国カード（Disembarkation Card or Landing Card）とパスポートを提出してビザのチェックを受け、入国のスタンプを押して貰う。

○荷物の引き出し（Baggage Claim）

日本出国の時に預けた自分達の荷物をターンテーブルから取る。

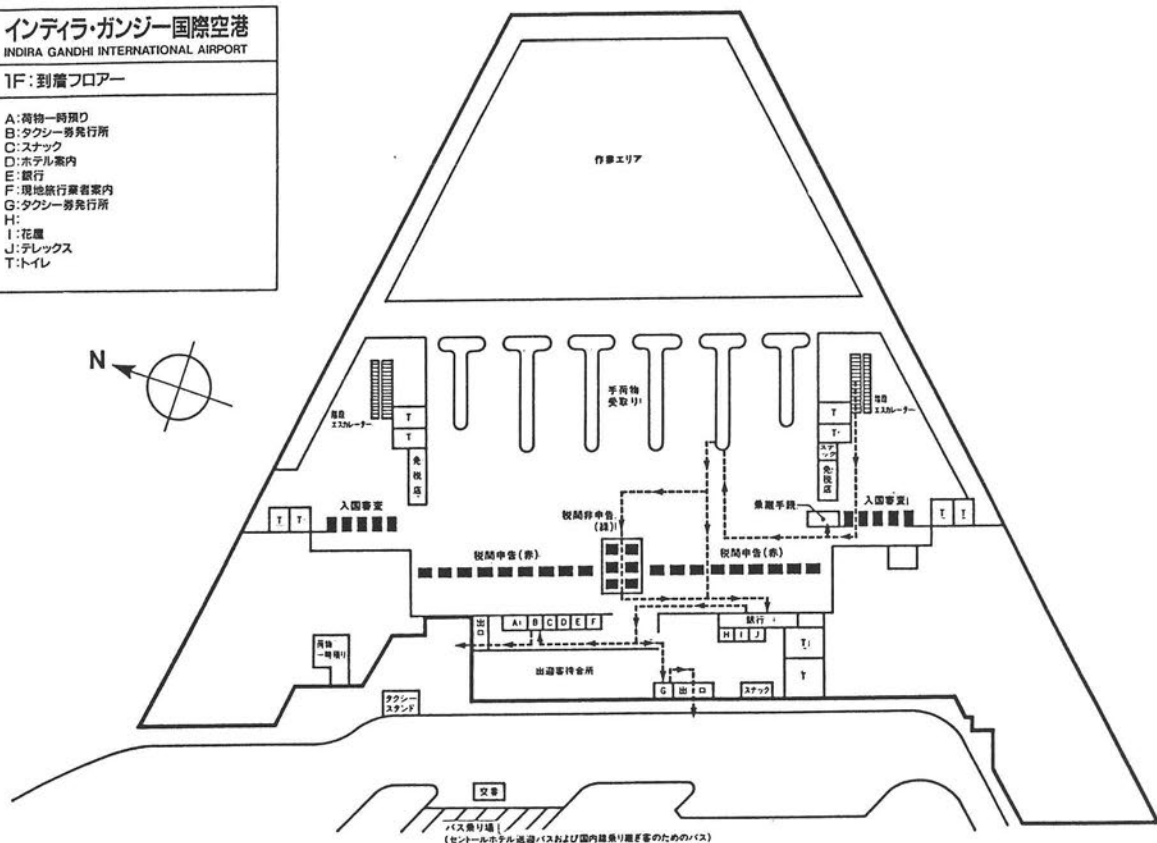
○税関（Custom）

申告品の無い場合は、緑色ランプ（Green Channel）の検査台へ行く。

申告品が有る場合は、赤色ランプ（Red Channel）の検査台へ行く。

荷物は調べられたり、ノーチェックだったり…いろいろであるが、プラパール・ボックスなどの目立つ箱物は中身を聞かれたり、T・B・R・E（Tourist Baggage Re-Export）をきられたりする場合がある。

インディラ・ガンジー国際空港	
INDIRA GANDHI INTERNATIONAL AIRPORT	
1F: 到着フロア	
A:	荷物一時預り
B:	タクシー券発行所
C:	スナック
D:	ホテル案内
E:	銀行
F:	現地旅行業者案内
G:	タクシー券発行所
H:	
I:	花屋
J:	テレックス
T:	トイレ



インディラ・ガンジー国際空港

※インド航空のデリー便は、1987年4月から香

入国時にパスポートに記載されたTBRE No. は
出国時には必ず消して貰う必要がある。

⑥ラジオ 1台

○銀行での両替 (Exchange)

外へ出てしまうと両替所はないので、市内までの交通費など当座必要のお金を両替して、インドの通貨ルピーを手に入れておくこと。高額紙幣ばかりでなく小額紙幣にも両替しておくことを忘れずに。

○市内へ

エージェントに空港の出迎えも頼んだ隊は、エージェントの用意してくれた車に荷物を積み込んでホテルに迎えばよい。

タクシーを利用してホテルへ行く場合は、空港のタクシー・チケット・カウンター (別図参照) でホテル名と氏名等を告げ、所定の料金を払うと引換に予約券をくれる。予約券に表示された番号のタクシーを見つけて乗り込む。

インドでの現地渉外

最近の風潮としてお金をかけない遠征がもてはやされ、何々隊がいくらでやったそうだから自分達もその位でやろう、と云った結果だけを鵜呑みにしてまねをする登山隊が多い。然し、自分達の能力を良く見極めて対処しないと、インドまで苦労しに行ったのか、登山しに行ったのか判らないような本末転倒の結果になりかねない。

インド・ヒマラヤを訪れる日本隊の多くは、成田から成田まで30~40日間の比較的短期間で出かける登山隊が殆どである。短い期間の中で少しでもベース・キャンプから上の登山活動に日数を割くためには、現地での渉外活動やアプローチをスムーズに運んでロスを少なくする必要がある。それには、インドが初めての登山隊などは、やはり現地エージェントの力を借りて煩わしい渉外業務をクリアーするのがベターであろう。

どうも日本人は“水とサービスはタダ”と云った感覚が根強く、なかなかサービスにお金を払うと云う事には抵抗があるようだ。然し、前述したように馴れない渉外業務に無駄な時間と体力を費やすよりも、その時間をお金で払う、と思えばそう高いものではない筈である。

エージェントは、サービスをビジネスとしているのであるから、頼んだものには当然お金がかかるのである。どうも日本人にはそれがガメツイと映るらしい。

炎熱地獄のようなデリー市内を無駄な労力を使って走りまわり、挙句のはて寝込んでしまったりしては元も子もない。自分達の経費予算の使い道を良く考えて、労を少なくして山へ向う事が肝要である。

IMF 本舎の宿泊利用について

1980年に建てられたインド登山財団 (IMF) の本舎には、宿泊施設などの内部設備も完備されており、インド・ヒマラヤを訪れる登山者に格安な料金で宿泊施設等が提供されている。

以下にその宿泊施設の管理規則を紹介する。

- ①この施設を利用できるのは外国の登山隊及びインドの登山・トレッキング隊、それに IMF のメンバーに限定されている。
- ②最初に7泊までの予約ができる。それ以上の滞在延長は、施設のこみ具合によって許可される。
- ③宿舎は男女別々になっている。
- ④宿泊設備としては、シングル・ベットが用意されている。
- ⑤宿泊料は、1泊5ドル。枕、毛布、敷布は別料金無しで用意される。
- ⑥予め連絡すれば、朝食、昼食、夕食、ベッド・

ティーなども用意される。

料金は、朝食5Rs、ベジタリアンの昼食と夕食が各7.5Rs、ノン・ベジタリアンの昼食と夕食は各15Rs、ベッド・ティー1Rs、(尚、これらの料金は若干変更することもあり得る)

⑦給湯、給水が用意される。

⑧パン、バター、タバコ、マッチ、ローソク、歯ミガキ、石ケンetc などの生活用品は売店に用意し、掲示板にそれらの価格を明示する。

⑨宿泊していない者が宿泊者を訪れることは許されるが、勝手に宿舎に泊ることは許されない。

⑩ IMF 本舎及び宿舎に於いてバクチをしてはいけない。

⑪宿泊者は、管理規程、規則を遵守し、宿舎をきれいに整理整頓しなければならない。

⑫宿舎の予約には、施設料金の20%を支払わなければならない。

チベットとその周辺の少数民族たち

山森 欣一

アリ（阿里）のチベット族

(2) 聖地周辺

チャンタン高原からインダス河の流れに沿って南に下ると半砂漠化した中に大きな街が現われる。西チベットの中心地「獅泉河」である。この街はチベット自治区にあるものの、経済圏としては、新疆のカシュガルに密着している。街のバザールにもウイグル系の顔が多く見られる。普蘭から延びる通信網もカシュガルへ通じている。

将来はここに飛行場を作って聖地巡礼にも便宜を計りたいと地区の責任者という。工場群も並びそれなりの意気込みがうかがえた。

街から1時間半ほど下るとインダス河の支流が合流する地点に出る。2時間も走ると、又、チベットの世界に逆戻りする。点するテントは山々に挟まれた谷合いにひっそりとある。インダス川右岸にもまばらに家が見える。私達が希望した西チベットに一時代を築いた「古格王国」遺跡への別れ道は細く小さな谷へ消えていた。レーからラサ入りを目指したヘディン達の頃にはこの付近に中心地「ガルトック」が栄えていたはずだ。ジープの中から身を乗り出してみるがそれらしき村は見当たらない。

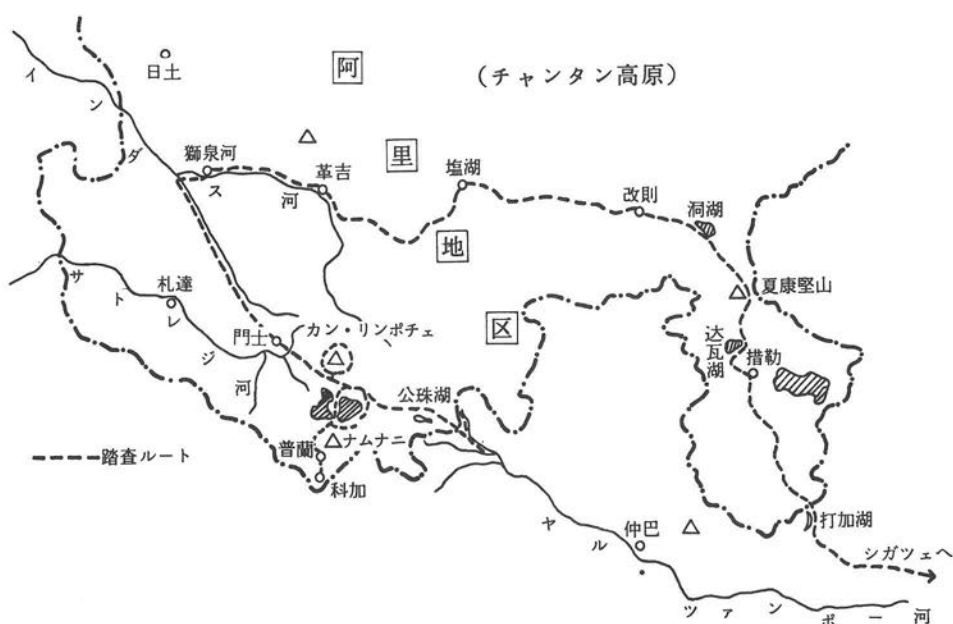
やがて、インダスの最上流部に近づくと、何も無く、動物もいなくなった。サトレジとの流れを



▲獅泉河、書記の娘



▲普蘭の祭りで踊るチベット娘



分ける峠を下ると、そこにはたくさんの遊牧民とウサギ、マーモットなどの天国であった。遊牧の中には、ネパールで見るドッコを背負っている者もいる。

門士の村は付近から石炭が採れるための招待所である。ここで青海から9ヶ月歩いてカン・リンポチェへ巡礼に来た2人のラマに会った。カン・リンポチェを20周したという。

門士から西には、ガルワールの山脈がかすかに見える。2時間ほどでカン・リンポチェの山麓に着く。

カン・リンポチェの中心地は大金(ダルチェン)である。チベットの巡礼達は、思い思いにテントを張っている。遠く青海や四川から一年以上も歩いてここへやってくる。多くの巡礼達は、何周かする。ちなみに五体投地礼で一周すると、普通に歩いて周る13回分に相当すると言いつえられている。五体投地礼は平地でも一日3～4km進めれば良い方だという。

ネパール西部から来た若いボン教の女性に逢った。少しばかり英語が話せる。完全装具を付けて五体投地礼を続けるその顔は、明るく晴れ晴れとしていた。ネパールからは、カリ河に沿って国境を越えて多くのヒンディ達が巡礼にやってくる。チベット人とは明らかに異った顔立ちで山羊や羊に木を積んでくる。

カン・リンポチェの周りには、四つの寺院があったらしいが、東側と南側の二つがかるうじて形をとどめている。文化大革命の折には、普蘭(昔のタクラコット)をはじめ多くの寺院が若き紅衛兵によって破壊されたといわれる。チベットでもその多くはチベット人の紅衛兵であったと知



▲ナムナニ偵察のヤクエ
ブランのヤクエ、ニンマ

▼門士付近のチベット娘

り驚いた。

都会化の波は、既にこの聖地周辺まで及び、チベット古来の服を脱ぎ捨て、洋服に身を包む生活が徐々に浸透している。開放され、多くの観光客を迎えるには、招待所の設備が必要となり、そこに働く従業員達は、身も心も脱チベットと成って行くのであろうか。

8月1日は、人民解放軍の創立記念日であり、これに併わせて普蘭で大きな祭があった。舞台正面には大



きくカン・リンポチェが描かれ、次々とチベットの踊が披露されて行く。古老が4人単調なリズムに合わせて踊る。一見優雅に見えるこの踊り手達も、もうほとんど少なくなっているという。テント生活から離れて久しい者達が、テント生活の伝統を守り、それをチャンタン高原でテント生活をしている人々が観る。

若者達の踊りは活発だ。晴れの舞台にチベット服に身を固めた女性従業員達は嬉しそうに踊る。彼女達にとってチベット服は、祭りに着る晴着となってしまうのである。

ネパール国境へ歩いて一時間ほどの所に科加寺があった。修復された中でラマ達が読経をしてい

た。正面の幕で覆われた中に立派な「砂マンガラ」が作られていた。カリ河をこのまま下って行けばもうシミコットまでは2～3日の行程である。

マファモツォから東へ向かいヤル・ツァンポーの源流を訪ねた。ほとんど無人地帯を行く。やがて5,000mを越えるマヨム・ラを下ると、ヤル・ツァンポーの北側の源流であるマヨム・ツァンポーに出る。この河岸段丘の美しい地帯に4張のテントがあった。我々のテントをのぞきに来る子供達は羊の皮で縫った独特のコートを着ている。顔は薄黒く鼻水も溜っている。ラサからヤル・ツァンポー沿いにカン・リンポチェを巡るトレッキングが盛んになれば、やがてこの付近にも招待所が

立ち、この子供達も羊のコートから黒皮のコートに変わるのであらうか。

広大な土地に、わずか5万人しかいないアリ地区。チベット人に、いつの時代にも民族衣裳を着て暮らすことを期待するのは不遜であらう。

しかし、顔は薄黒くとも目に輝きを持って生きている今の時代の方がはるかに幸福のような気がしたのであった。



▲ネパール国境近くのクジャ寺のラマ達

■ 寸 感 ■

10月8日に中・ソ国境のホルガス（霍尔果斯）口岸が外国人に開放されるとの情報を得て、新疆ウィグル自治区のウルムチから天山北路を辿ってソ連ウズベク共和国のタシケントに至るシルクロードの旅に出かけてきた。

10月に入ってから天山北路は、既に秋も深まり、あのコバルトブルーに輝くセリム湖畔の草原も見事な黄い大地となっていた。チュルク語で、「草原を駆ける自由人」を意味すると云うカザフ族の人達も冬の放牧地へと移牧した後だった。

果物の谷と呼ばれる“果子沟”で素晴らしい紅葉を満喫して、一夜をカザフ族のユルト（天幕）に泊めて貰った。ドンブラを奏でながら歌う彼らの歌に耳を傾け、サモワールで注がれるチャイをご馳走になった。

かつては広漠とした中央アジアの大地を草を求めながら1年に2,000km余も移動したと云われるが、今は中国でもソ連でも、国の政策として定住する方向に向いつつあるようだ。

チベットであのような騒乱が起っているとは露知らず、伊犁地区での少数民族とのふれあいを胸に、我々はホルガス河を越えて同じカザフ族の住むソ連・カザフ共和国へと足を踏み入れた。

事務局 日 誌 (10月)

- 14日(水) ヒマラヤNo.192発送
- 16日(金) 中・ソ辺境旅遊隊帰国
- 19日(月) 事務局打ち合わせ(稲田、尾形)
- 20日(火) 冬期K2集会
- 21日(水) ゲニ隊報告書編集委員会
- 25日(日) 西藏登山協会代表団歓迎夕食会
(遠藤、稲田、新貝、飛田、尾形、16名)
- 26日(月) 事務局打ち合わせ(稲田、尾形)
東京集会(15名)
- 28日(水) 中江・中島新旧駐中国大使歓送迎会(尾形)

ヒマラヤNo.193 (12月号)

昭和62年11月10日印刷 62年12月1日発行

発行人 遠藤 登
編集人 尾形 好雄
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

— 天府の霊峰 —

雪 宝 頂

1986年夏、H A Jは四川省登山協会との合同で岷山々脈の最高峰、雪宝頂(5,588m)へ登山隊を派遣した。登山は日中登攀隊員14名中、13名が8月5日、6日の両日に亘って初登頂に成功した。

此の程、この日中友好の足跡を記した報告書が上梓された。

B5版、64ページ、カラー写真8ページ、モノクロ写真多数

(頒 価) 1,700円(送料込み)

(連絡先) 〒-160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

— 謎の河の秘峰 —

ギ ャ ラ ・ ペ リ

ヒマラヤの謎の河として知られるヤル・ツァンポー河の大湾曲部には、南にナムチャバルワ、北にギャラ・ペリと云う2つの玉峰が対峙している。

1986年秋、H A J隊は悪天候に苦しまれながらも先ず手初めにこのギャラ・ペリを陥落した。中国登山に関する資料が豊富に盛込まれている。

B5版 127ページ、カラー写真4ページ、モノクロ写真12ページ。

(頒 価) 2,000円(送料込み)

(連絡先) 〒-160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

TREASURE TOUR

EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号

カラコルムの秀峰 ウルタル山

遥かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

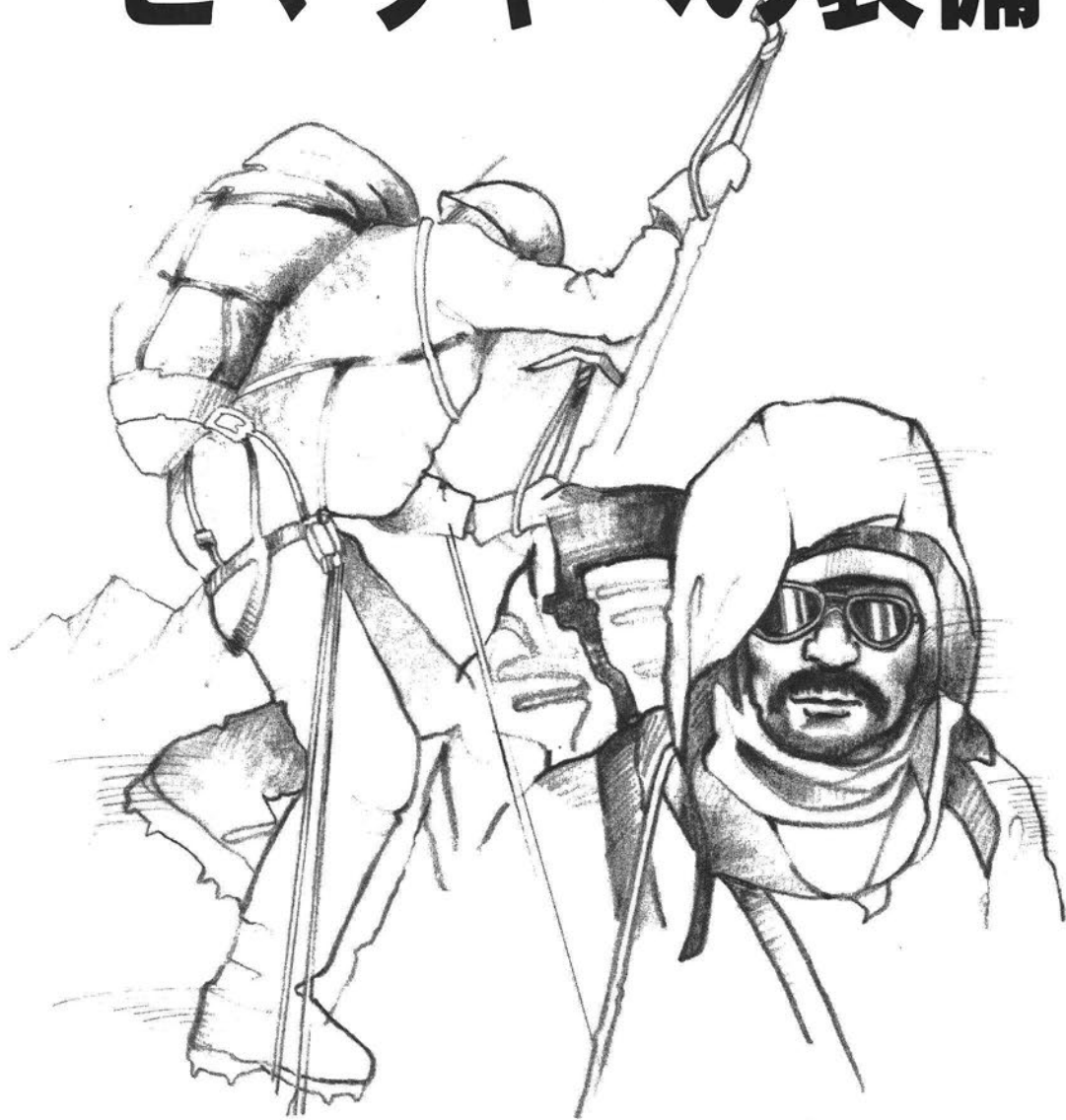
トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03 (208) 6601～3
- 大宮店／〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486 (41) 5707
- 水道橋登山店／〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03 (264) 5575～6
- 神田登山店／〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03 (295) 0622
- 新宿西口店／〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03 (346) 0301(代)
- 高崎店／〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273 (27) 2397(代)
- 札幌登山店／〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011 (222) 5305

- 新潟店／〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252 (43) 6330
- 仙台店／〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222 (97) 2442
- 町田ジョルナ店／〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427 (26) 6248(代)
- フーズショップ／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03 (232) 1286
- 外商部／〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03 (200) 7219
- 事務所／〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03 (200) 1004